久留米藩における武道教育

－講武榭と加藤田神陰流－

大坪　　壽*

The Teaching of Martial Arts in Kurume-Han

— Koubu-Sha and Katoda Shinkage-Ryu —

Hisashi OTSUBO*

Abstract

The Chikugo region which has developed around Kurume is well known as a region of the martial arts. It has been said that there used to be many calligraphers and sholars in the Chikuzen region, politicians and lawyers in the Hizen region, and martial artists in the Chikugo region. It can be said that the spirit of training martial arts in Chikugo region owes a lot to its training system in the Arima era.

Some studies have been done on the martial arts and their training system in the Meiji era, which were influenced heavity those of the Arima era.

In this study, I would like to examine the teaching of martial arts at Kobu-sha and Katoda Sinkage-ryu in Kurume-han. This study is based on the collection of books of the Tsuruku family and of the Kurume public library which have never been studied.

KEY WORDS: *Kurume-han, Koubu-sha, Katoda shinkage-ryu, Heihachiro Katoda*

はじめに

久留米を中心とした筑後地区は，武道が盛んな土地柄として知られている。久留米藩の俗諺に「筑前書，肥前公事、筑後武」と言われており，古くから筑前には書家や学者が多く，肥前には政治家や法律家が多いが，筑後には兵学武芸が盛んであったと伝えられている。その尚武の気風は藩政時代の武道教育に負うところが大であると言える。

久留米藩の藩政時代およびその影響を色濃く残している明治期の武道あるいは武道教育に関する研究はいくつか出版，報告されている。[1)3)4)8)9)12)19)]

本研究では，上記研究ではほとんど使われていない，福岡県三潴郡西牟田郷士史家鶴久二郎氏が収集した文書（以下鶴久家文書）および久留米市民図書館蔵書をもとに久留米藩の講武榭と加藤田神陰流の武道教育について考察し報告するものである。

久留米藩武芸各流派

久留米藩で起った流派はみられず，久留米藩に伝えられた各流派は次の通りである。

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

剣術
　神陰流[6)20)]
　浅山一伝流[21)]
柔術
　関口新々流[22)]
弓術
　竹林流[23)]
　小笠原流[24)]
槍術
　妙見自得流（管槍）[25)]
馬術
　人見流[26)]
軍法
　上杉流[27)]
　速水流[28)]
砲術
　磯流（小筒）[29)]
　岩戸新伝流（火矢）[30)]
　鳥居流[31)]

久留米藩の神陰流は加藤田神陰流と呼ばれ，浅山一伝流は津田一左衛門により津田一伝流に改称された。

鶴久家文書によれば以上の武芸流派をみることができるほか，居合，測量に関すると思われる巻子も収集されている。また鶴久家文書で，元治2年（1864）から明治5年（1872）までの久留米藩の武道教育を行なった講武榭のことを記した『講武榭御用家業雑記』によれば，上記流派のほか

「弓術
　竹林流　　宮部弘太
槍術
　宝蔵院主馬流　　古川小平太
　　弓場勘兵衛
居合
　心以心流　　井上栄
砲術
　若松流　　平山久兵衛
　荻野流　　長野卯八[2)]」

の流派および師範をみることができる。

久留米藩では，第6代藩主有馬則維が学問武芸を好み，宝蔵院高田流の森八郎右衛門尚久を，7代藩主有馬頼僅は直心影流の今井湛斎を指南役として召し抱えた。また，前述の森は柔術良移心頭流の師範でもあった。他に柔術では関口流や扱心一流が伝えられている。

久留米藩の教育の概要

天明2年（1782）11月18日「家中武芸稽古所」を城内にたてて，藩としての教育をし振興を計った。師範役は前述の通りである。学問は，有馬則維・頼僅の2代に仕えて藩士に朱子学を教授した合原窓南，天明3年（1783）頼僅に招かれた高山畏斎が担当した「城内学問所」が上げられるが，本格的なものは天明5年（1785）両替町に開設された「講席（講談所）」であり，広津藍渓・杉山正仲が教育にあたり武士町人の聴講を奨励した。この講席は同7年狩塚門内に移し「修道館」と改称した。寛政7年（1795）1月修道館が焼失したため，小郡の豪農樋口甚蔵の資を得て翌8年（1796）11月城内追手門内に新築し「明善堂」と改称した。安政6年（1859）明善堂が改築されるとともに萬延元年（1860）従来の学制を改革し，前述の武芸稽古所を併合して武館として「講武榭」と名付けられた。改築した明善堂を文館とし，武館と併せて「学館」と称して文武両修の藩校として明治4年（1871）の廃藩置県まで続いた。

講武榭における武道教育

学館の指導組織は，学館総督，学館御用掛（慶応2年（1866）学館奉行に改称[2)]）御用席詰，肝煎，学館御目付，各科に師範役（明治3年（1870）指南役に改称[2)]）を置き，槍術・剣術・大小銃・柔術・弓術・兵法・居合などを指導した。師範役は各自に稽古所を設けて指南に従事し，講武榭会日にそれぞれ門弟を率いて修行させた。定会としては1年1回冬期に大会があり，藩主または家老職が隣席検閲し，優勝者には恩賞を与えた。また毎年数回の試合があり，家老以下隣席した。なお各科の修行には一定の制を設け，その技が上達するに及んで等級を分け，「初級を目録，二級を免許，三級を印可[33)]」と称して，その師家より各級伝統の巻物一軸を賞した。明治3年（1870）の「講武

榭紀則[2)]」によれば，試業は試合によって行なわれ，「等級ハ是迄の目録を初級後目録を二級免許を三級印可を等外と推定候事[2)]」との記述があり改正が行なわれたと思われる。寄り合い稽古や見分の折りの記述にみられるように，指導はまず手数(現在の基本と形)，長ずれば試合で行なわれた。

会日は，「一の日居合　久保直衛跡門弟　井上栄門弟，三の日剣術　津田一左衛門門弟　今井静左衛門門弟　加藤田平八郎門弟，四の日射術　松岡友紀跡門弟　山村唯八郎門弟　吉田猪熊門弟　宮部三左衛門門弟，五の日柔術　赤松要助門弟　長沢小四郎門弟　渡辺七太夫門弟　下坂五郎兵衛門弟　森弥兵衛門弟　六の日槍術　井上弥左衛門門弟　古川小平太門弟　深井半左衛門門弟　森弥兵衛門弟[2)]」，「九月二十三日剣術，十一月五日柔術，十一月七日槍術[2)]」のように種目ごとに日を決めて行なわれ，門弟を率いて出席したことがうかがえる。明治２年（1869）９月10日以降は無格陪臣の出席も可能となった。

また新年には明善堂開講，講武榭射初めをして発会した。

師範は既述したほかに，加藤田神陰流の松崎浪四郎が明治３年（1870）「岸致知家来　松崎浪四郎　剣術指南申付候依之一代士族申付給禄四拾三俵相與候事　庚午十一月十七日　久留米藩庁[2)]」と剣術指南を仰せ付けられたほか，柔術に関口新々流の中段蔵，森巽，馬術に吉田俊彦，嶌長三郎，砲術に吉村多門，長谷川常順，青木半作，弓術に杉政五郎，居合に杉山清兵衛，下村清蔵，妹尾亀十郎らの名前が認められる[2)]。

加藤田神陰流

加藤田神陰流の伝流について『師系集伝[6)]』によれば，

鵜戸大権現
愛洲移香
上泉武蔵守
小笠原上総
針谷五郎左衛門
小出坊一雲
片岡伊兵衛
中村権内
加藤田新作
加藤田平八
加藤田新八

概略以上の通りである。この後に，

加藤田平八郎

と続くことになるが，ほかの鶴久家文書では上泉武蔵守から始まっている[20)]。また小出坊一雲ではなく小田切一雲と記されている[20)]。あるいはそれが脱している文書もある[32)]。

九州に伝えたのは片岡伊兵衛秀安で，筑前黒田美作の家臣である。幼少より一雲の門で修行し，ついに奥旨を悟り印可真面目を受けた。さらに同じ黒田美作の家臣中村権内安成に伝えられた。加藤田新作武述は福岡において中村権内に学び，享保元年（1716）久留米藩主有馬侯に仕え同７年（1722）師範となり，久留米藩に神陰流を伝えた。次男十助正武は池田家の養子となり，藩師範役を勤めた。新作は宮崎金衛門の男平八武信を養子にし家芸を継がせ，藩師範役を勤めた。その子新八武陣は傑出しておりその伝を継ぎ，文化14年（1817）藩師範役になった。加藤田平八郎重秀父は加藤十助，新八の養子となった。文政元年（1818）11歳で養父に入門し16歳で加藤田家に入り，「天保８年（1837）頃家督を相続して・・・明治５年（1872）まで36年間教授した。・・・弘化３年，父新八が没してから，明治５年までに教授した門人は2820人というから，家督相続の天保８年からの10年を加うれば3500人を超ゆることはたしかである。その中に奥免許を得た者が12人あった[34)]」とあるように多数の門弟を育てた。その指導ぶりは，加藤田門の高弟園田円斎の令孫徳太郎が「平八郎は達人と云うよりは引立て方が上手と云うので有名で，沢山の良い門弟を出したと云う。これは御本人が学者であることや男大助の子弟引立てぶりなどから見ても思合さるる[13)]」と述べている。

以上述べたように，加藤田神陰流は平八郎の代に最も隆盛を極めたと思われる。

加藤田平八郎道場

先に講武榭における武道教育の条で述べた通り，師範役は講武榭会日以外は各自の道場で門弟の指南に携わっていた。剣術各流派の道場の所在地については「津田の道場は日吉町六ツ門の北一町位，東に入北側に在る。・・・今井の道場は京の隈二番目に在る。・・・加藤田の道場は庄島の西立丁と古丁の交叉点，西北の角の近くにあった[14]」と伝えられている。「天保時代久留米市街図[35]」で所在地を確認できるが道場名までは記されていない。

ここで加藤田平八郎の道場名について，久留米市民図書館蔵書の主静堂が記した嘉永7歳(1854)『門弟列簿』と慶応元年(1865)『剣術門弟名前列』と『真神陰流免状』，『加藤田日記』，『剣士松崎浪四郎伝』および『大日本剣道史』を比較し考察をする。

まず『剣術門弟名前列』と記されている通り剣術の流派の物であり，『加藤田日記』の明治6年(1868) 4月19日に「主静堂観花宴[5]」の記述がある。また『加藤田日記』の門弟の氏名を『門弟列簿』および『剣術門弟名前列』に認めることができる。さらに『門弟列簿』の奥免許に，

「園田又左衛門　文政五午閏正月入門
　　同七申六月目録
　　同十一子正月免状
立石市蔵　文政九戌三月入門
　　同十三寅正月目録
　　天保二卯免状
　　弘化三年五月七日奥免許
高原桂之進　文政七申三月入門
　　天保三辰正月目録
　　同六未正月免状
荒巻吉十郎　文政七申八月入門
　　天保三辰正月目録
　　同六未正月免状
　　嘉永二酉二月十一日秘伝之巻[10]」

とあり，また『剣術門弟名前列』に

「松崎浪四郎　奥免許
山本栄太郎　文久元酉正月免状
辻弥一郎　文久三亥正月免状
園田助太夫　文久元酉正月免状[11]」

とある。

松崎浪四郎は嘉永2年(1849) 宝蔵院流槍術免許を受けた後，「生涯剣一道を守って，他の武術は兼修しない決心を固めた[15]」ことから，他流派から奥免許を受けたとは考えられない。山本栄太郎が加藤田平八郎から受けた『真神陰流免状[7]』の巻末によれば，授受の年月は萬延2酉年正月になっている。その年は2月19日に文久に改元されており1861年である。園田助太夫については『剣士松崎浪四郎伝』の記述[16]と一致する。その他の者については『大日本剣道史』より抜粋し比較する。

「園田園斎，初め又右衛門　文政五年入門，十一年正月奥免許
立石市蔵，文政九年入門，天保二年正免許
高原桂之進，文政七年入門
荒巻吉十郎，文政七年入門，嘉永二年奥免許
梅崎弥一郎，文久三年免状[34]」

と述べられている。園田円斎の氏名の誤字があり，奥免許を入門後6年で受けているが，最短の松崎浪四郎で入門後5年で免状，10年で奥免許取得，他の門弟が入門後20～25年で奥免許を受けているのと比較すると，『門弟列簿』通り文政11年は免状を受けたと解釈するのが妥当と思われる。辻弥一郎は後の梅崎弥一郎である。その他については免許・正免許・免状のように不一致な文言の記述もあるが，内容的には合致しているとみることができ，主静堂は加藤田平八郎の道場名と思われる。

楽之館，済美館

明治時代になり，明治4年(1871) 3月23日「学校文館武榭共に当分休会[2]」となり，翌明治5年(1872) 4月3日「指南役被免[2]」，藩剣術指南役を勤めた津田一左衛門正之は世の大変革と武道の廃止によって望みを失ったとみえ伝書を残らず焼いて自殺した。さらに明治9年(1876)の廃刀令，文明開化の風潮の中で，加藤田門の高弟，奥免許12名のひとり園田円斎は明治13年(1880)荘

島小学校構内に体操所の名義で剣道場楽之館を設立した。館名は加藤田平八郎の実弟久留米藩儒加藤幾次郎の撰で論語から採ったものである。円斎は73歳の高齢にかかわらず自ら子弟を引き立てた。さらに16年（1883）円斎は同じく日吉小学校構内に済美館を設けた。館名は松崎浪四郎の紹介で山岡鉄舟の命名である。円斎は両道場で77歳まで指導した。荘島町出身の松崎浪四郎も時々楽之館に姿を見せたと伝えられており，明治23年（1890）「八月二十二日久留米済美館に於て試合，二十三日楽之館に於て梅崎弥一郎と試合[18]」したと言われている。その後楽之館は梅崎弥一郎が引き受けて指導していたが，明治35年（1902）9月熊本第五高等学校剣道部師範に迎えられたため指導者を失い衰滅した。また済美館は明治24年（1991）円斎の死後その子助男が継ぎ，山脇邸に移転して山本善次郎や津田一伝流の津田教脩，武藤源八，上原恒記らが指導にあたり宗重遠や前田隆礼（久留米第18連隊長）もまれに来て稽古を続けていたが，明治33～4年頃山脇邸が人手に渡るとともに廃絶した。

その中で加藤田平八郎の後継ぎ大介の道場だけは，一斉教授に着目して剣道となぎなたを指導し，子弟数も多かった。

日本の伝統文化にとって厳しい時代の中，旧久留米藩においても構武榭休会，指南役廃止という状況の中ではあったが，稽古は各指南役の道場で続けられ，加藤田平八郎の最後の奥免許は明治5年梅崎弥一郎と山本善次郎に引き渡されていることから稽古は続けられていたと思われ，その後は楽之館と済美館が中心となって稽古は活発に続けられていた。

おわりに

以上鶴久家文書『師系集伝』，「講武榭家業雑記』および巻子ならびに久留米市民図書館蔵『門弟列簿』，『剣術門弟名前列』を解読し，久留米藩構武榭および加藤田神陰流の武道教育の模様を明らかにした。

しかし，時代的にも江戸時代中期以降明治期までであり，加藤田神陰流を中心に考察したため限られたものとなった。今後上記資料をさらに検討するとともに時代的にもさかのぼって分析する必要があると思われる。

参考・引用文献

1）荒木英之：久留米剣道教育沿革史，久留米信愛女学院短期大学紀要，8，pp. 99－117，1985.
ほかに武道学研究に3編の報告がある。

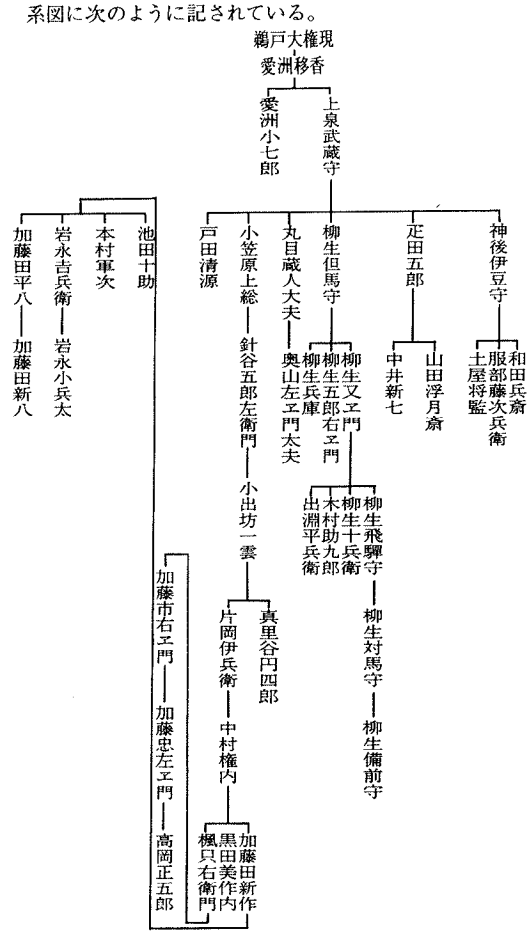
2）著者不明：講武榭御用家業雑記，年代は元治2年（1865）から明治5年（1872）にわたって書かれている．鶴久家文書．

3）石橋和男：良移心頭流中村半助手帖，石橋大和，久留米，1980，p. 278.

4）加藤田平八郎：加藤田日記，久留米郷土研究会，久留米，1979，p. 269.

5）同上書，p. 221.

6）加藤田平八郎：師系集伝，1843，鶴久家文書，
系図に次のように記されている。



7）加藤田平八郎より山本栄太郎：真神陰流免状，万延2年（1861），熊丸家文書.
8）小林正憲，黒木俊弘，荒木英之，大坪　寿：久留米藩・松崎浪四郎をめぐる剣術試合の一考察，武道学研究，19（2），pp. 123－24，1986.
9）村山勤治：鈴鹿家蔵加藤田文書「歴遊日記」について，武道学研究，17（1），pp. 73－74，1985.
ほかに武道学研究に3編の報告がある。
10）主静堂：嘉永7歳，門弟列簿，主静堂，1854，久留米市民図書館蔵.
11）主静堂：慶応元年，剣術門弟名前列，主静堂，1865，久留米市民図書館蔵.
12）園田徳太郎：剣士松崎浪四郎伝，久留米図書館友の会，久留米，1957，p. 327.
13）同上書，p. 108.
14）同上書，pp. 126－27.
15）同上書，p. 28.
16）同上書，p. 25.
「父の助太夫も免許持ちで・・・」
17）同上書，p. 216.
18）同上書，p. 209.
19）杉森彬，武道物語，杉森彬，八女，1978，p. 101.
20）加藤田新八より有馬大和守：神陰流剣術目録，天保11年（1840），鶴久家文書.
上州之産　上泉武蔵守　藤原信綱
信州之産　小笠原上総　入道シテ玄信斎
野州之人　針谷五郎左ェ門　入道シテ夕雲
奥州之人　小田切一雲　後改空鈍
筑前之人　片岡伊兵衛　秀安
筑前之人　中村権内　安成
筑前福岡之産　加藤田新作　藤原武述
筑前福岡之産　池田十助　正武
筑後久留米之産　加藤田平八　藤原武信
加藤田新八（印花押）
天保11庚子年8月15日
有馬大和守殿
21）津田武太夫より渡辺庄三郎：一伝流武者組目録，文化9年（1812），鶴久家文書.
浅山一伝斎　重晨
小島仁左衛門尉　光友
仲村九兵衛尉　光利
中井茂右衛門尉　重頼
小野里新兵衛尉　勝之
中田七左衛門尉　政経
浅山一伝　重行
森戸三太夫　朝恒
森戸三休　偶太
森戸一伝　金春
森戸三太夫　春邑
森戸帰春　鏗綱
津田武太夫　教定
津田武太夫　（印花押）
文化9壬甲歳9月
渡辺庄三郎殿
22）不明より緒方勘太：表題不明，天保12辛丑年（1841），鶴久家文書.
後号柔心　関口弥六左衛門　義勝
渡辺四郎兵衛　重金
赤松十郎左衛門　義直
赤松要助　祐直
佐田門兵衛　直賢
佐田門兵衛　直英
佐田庄蔵　直庸
不明
信成（印花押）
天保12辛丑年正月吉日
緒方勘太殿
23）瓦林与次右衛門尉成直より不明：日置派射形灌項，慶長6年（1601），鶴久家文書.
日置弥左衛門尉
安松左近丞
安松新次郎
弓削甚左衛門尉
弓削弥六郎
石塔竹林如成
石塔林左衛門尉貞次
瓦林与次右衛門尉成直（花押）
慶応6歳11月3日
24）早水七郎右衛門尉昌成より宮川吉太夫：当家羽揃，寛文元年（1661），鶴久家文書.
小笠原大膳太夫長時
同右近太夫貞慶
堀平太夫長勝
出水権左衛門尉貞則
早水七郎右衛門尉昌成
寛文元年12月吉日
宮川吉太夫殿
25）井上慶太照算より有馬大和：妙見自得流管鎗目録，天保7年（1837），鶴久家文書.

尾州名古屋住　杉本半蔵
泉州堺住　杉本宗真
筑前州福岡住　井上兵左衛門照一
筑後州久留米住　井上三太夫久豊
井上弥左衛門満
井上順蔵照邑
井上三太夫照敬（花押）
井上慶太照算（花押）
天保7丙申年6月10日
有馬大和殿

26) 城九十九より有馬織部：三目録，慶応4年（1868），鶴久家文書.
人見清左衛門入道流水
村上善次郎正次
長岡直右衛門応義
城志解喜宗秀
城大八隆元
城六郎隆経
城九十九隆光（印花押）
慶応4戊辰年8月吉辰
有馬織部殿

27) 杉山八左衛門尉より有馬河内：卒令因結切紙，嘉永4亥歳（1851），鶴久家文書.
上杉官領入道不識院謙信輝虎朝臣
加治遠江守景英
加治万休沙弥景治
加治竜爪斎景明
沢崎主水入道景実
佐久間頼母助石融入道景忠
成田徹翁入道景純
諸富三郎左衛門尉保義
渡瀬将監詮成
杉山清兵衛尉正伸
杉山清兵衛尉正篤
杉山八左衛門尉（印花押）
嘉永4亥歳3月4日
有馬河内殿

28) 黒川理兵衛より有馬主税助：表題不明，万治2年（1659），鶴久家文書.
黒川理兵衛（印花押）
万治2年9月吉日
有馬主税助殿

29) 浜田郷右衛門親直より有馬大和守：磯流小筒目録，天保10年（1839），鶴久家文書.
磯与左衛門尉景次
浜田郷右衛門尉和直
浜田喜内当直
浜田郷右衛門親直（印花押）
有馬大和守殿

30) 不明：岩戸新伝流火矢之巻，年代不明，鶴久家文書.
井上伝太左衛門成安伝
山本恭安高寿

31) 鳥居安之進より有馬織部：玉火矢巻，正徳5年（1715），鶴久家文書
鳥居安之進（花押）
正徳5乙未年10月吉日
有馬織部殿

32) 加藤田平八郎より吉田金九郎：真神陰流剣術目録，安政6年（1859），鶴久家文書.
上泉武蔵守
小笠原上総
針谷五郎左衛門
片岡伊兵衛
中村権内
加藤田新作
加藤田平八
加藤田新八
加藤田平八郎重秀（印花押）
安政6未年2月吉辰
吉田金九郎殿

33) 久留米市役所：久留米市誌中編，名著出版，東京，1972，p. 4.

34) 堀正平：大日本剣道史，同朋出版，京都，1986，pp. 363－64.

35) 久留米市史編さん委員会：目でみる久留米の歴史，久留米市，久留米，1979，付録.